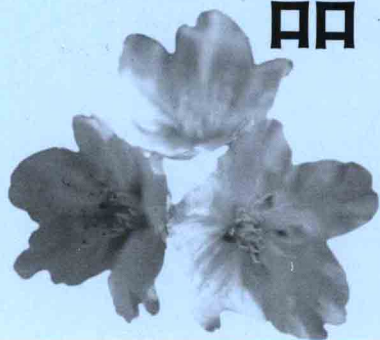


# 日本文学作品

## 选读

王吉祥 主编



にほんぶんがくさくひん

●**松尾芭蕉**是江户时代前期的俳句诗人，他追求闲静、古雅，开创了一代新风，把俳句推向艺术高峰，带进文学的殿堂。 ●《心》是**夏目漱石**的中篇小说，由“先生和我”、“父母和我”、“先生和遗书”三部分构成。 ●《鼻子》是**芥川龙之介**的历史题材短篇小说，故事取材于日本平安时代末期的民间传说故事集《今昔物语》。 ●《伊豆舞女》是**川端康成**的短篇小说，故事源于作者19岁时在伊豆的亲身经历。 ●《去中国的小船》是**村上春树**最早的短篇小说，首部短篇小说集即以此命名……

浙江省第二批实验教学示范中心建设项目

# 日本文学作品选读

王吉祥 主编



ZHEJIANG UNIVERSITY PRESS  
浙江大学出版社

## 图书在版编目 (CIP) 数据

日本文学作品选读/王吉祥主编. —杭州: 浙江大学出版社, 2011.11  
ISBN 978-7-308-09299-9

I. ①日… II. ①王… III. ①日语—阅读教学—高等学校—教材②文学—作品—介绍—日本 IV. ①H369.4: I

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2011)第 231522 号

## 日本文学作品选读

王吉祥 主编

---

责任编辑 杜玲玲

封面设计 续设计

出版发行 浙江大学出版社

(杭州市天目山路 148 号 邮政编码 310007)

(网址: <http://www.zjupress.com>)

排 版 浙江时代出版服务有限公司

印 刷 浙江云广印业有限公司

开 本 787mm×1092mm 1/16

印 张 16.75

字 数 437 千

版 印 次 2011 年 11 月第 1 版 2011 年 11 月第 1 次印刷

书 号 ISBN 978-7-308-09299-9

定 价 30.00 元

---

版权所有 翻印必究 印装差错 负责调换

浙江大学出版社发行部邮购电话 (0571)88925591

# 序 言

翻开本书，一缕古雅的芳香即从日本文学花园的深处幽幽飘来，她发自千年之前的万叶短歌。

在这美丽的文学花园中，你可以伴随古今诗人吟风弄月，也可以聆听兼好法师谈论世事人生。《山月记》中你将看到一个唐朝的才子怎样变成斑斓猛虎；从《红茧》你能体会青年男子为蜗居付出自我消失的代价；夏目漱石用《心》描述什么是良心纠结之苦，川端康成以《伊豆舞女》让初恋如幻似梦。还有一种短诗叫“川柳”，从中你可以领略到日本人古板其外而滑稽其中……特意安排的压轴之作是村上春树《驶向中国的小船》，他的这篇具有中国情结的小说，轻松读来，我们会奇遇似曾相识的中国人老教师，还能邂逅一位可爱的邻家女孩。掩卷之时，你会发现东瀛的文学原来如此亲切。

这本《日本文学作品选读》从地位相当于中国文学《诗经》的《万叶集》为开端，精选了古典和歌、古典“物语”、近现代小说、散文，近现代短歌、俳句。不论你是日语专业的学生还是日本文学爱好者，皆可在这百花园中尽情徜徉享受。

编者在选编时紧紧遵循以下几点原则：

其一，厚古而不薄今，既有古典诗歌、“物语”，也有现代小说、散文；

其二，本书不像许多同类书那样，让日本文学作品选读等同于小说选读，日本人深爱的短歌和引以为豪的俳句的选入，让《日本文学作品选读》名至实归；

其三，每篇课文前面都有一个题解，以简短的二百多字，介绍了所选作品的作者、主题思想、艺术风格等，其间荟萃了中日两国许多学者的智慧，也包含着编者的见解；

其四，作品基本按照文学史中出现的顺序编排，但根据作品的体裁、内容、风格、难易作了合理安排，希望方便教学，同时也让读者在阅读时有移步换景之感。

循着万叶和歌的幽香一路走来，日本文学花园中的每一片叶，每一朵花，不只在书页轻翻时随风摇曳，一定永久绽放于欣赏她的人们的心间。

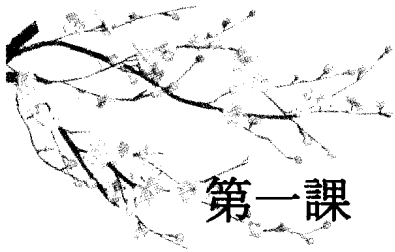
王吉祥

2011年10月18日 于浙江万里学院

## 日本文学作品选读（目录）

第一課	古典短歌	1
第二課	竹取物語	9
第三課	源氏物語（桐壺）	16
第四課	平家物語（木曾の最期）	23
第五課	枕草子	30
第六課	徒然草	34
第七課	芭蕉・蕪村・一茶の俳句	39
第八課	古川柳	47
第九課	浮雲	53
第十課	五重塔	60
第十一課	高瀬舟	68
第十二課	十三夜	77
第十三課	武蔵野	89
第十四課	近現代詩	104
第十五課	こころ	110
第十六課	刺青	132
第十七課	鼻	139
第十八課	走れ、メロス	146
第十九課	友情（下篇）	156

第二十課	城の崎にて	164
第二十一課	檸檬	170
第二十二課	蠅	176
第二十三課	伊豆の踊り子	182
第二十四課	風立ちぬ	200
第二十五課	屋根の上のサワン	206
第二十六課	山月記	212
第二十七課	現代短歌	219
第二十八課	現代俳句	226
第二十九課	赤い繭	233
第三十課	誘拐	237
第三十一課	キッチン	241
第三十二課	中国行きのスロー・ボート	250



## 第一課 古典短歌

**题解：**本课的和歌选自《万叶集》和《古今和歌集》。《万叶集》是日本现存最早的诗歌总集，其地位相当于中国文学史中的《诗经》。其结集于奈良时代(710—784)末期，大伴家持被认为是主要的整理编撰者。全集二十卷，收诗歌约 4500 首。按内容可分为杂歌、相闻、挽歌等。描绘四季风物、记录行幸游宴、狩猎旅行，表达友人、恋人、亲人之间的情感等。总体风格雄健、纯朴。《古今和歌集》是第一部天皇下令编撰的和歌集，由纪贯之等四人编选，完成于 950 年。全集 20 卷，收短歌 1100 余首，恋歌占了近三分之一。与《万叶集》不同，内容上充满贵族化倾向，表现讲究技巧，风格纤丽典雅。

あかねさす紫野行きしめの標野行きのもり野守は見ずや君が袖振る（万葉集 1-20）

額田王

### 現代語訳

紫草の生える野を、狩場の標を張ったそ別館の野を歩きながら、そんなことをなさつて——野の番人が見るではございませんか。あなたが私の方へ袖を振っておられるのを。

### 注釈

◇あかねさす：「紫」の枕詞。

◇紫野：貴重な染料であった紫草を栽培した野。

標野：一般の者の立ち入りを禁じた野。禁野。標(しめ)とは、占有のしるし。縄を張

ったり杭を打ったりした。

◇野守：禁野の番人。暗に天智天皇を指すとする説がある。

## 作者紹介

額田王（ぬかたのおおきみ）：生没年不詳、飛鳥（あすか）時代の歌人。7世紀末までは在世、日本の代表的な女流万葉歌人である。鏡王（かがみのおおきみ）の娘。大海人皇子（おおあまのおうじ）（天武天皇）の寵（ちょう）を得て十市皇女（とおちのひめみこ）を産み、のちに天智天皇に召された。万葉集に十余首の長歌・短歌を収録。才気にとんだ歌風は、優麗で格調が高い。

春過ぎて夏来るらし白栲の衣乾したり天の香具山（万葉集 1-28）

持統天皇

## 現代語訳

春は過ぎ去って、夏がやって来たらしい。白い布でつくった衣が乾してある。天の香具山に。

## 注釈

◇夏来にけらし：夏が来たようだなあ。ニは完了の助動詞。ケラシは助動詞ケリ・ランの接合した語で、ケルラシの約。もともと過去の推量（～したのだろうか）をあらわす語であるが、その後ケリと同じように、「気づき」とそれに基づく詠嘆をあらわす表現としても使われるようになった。

◇白栲の衣：栲（たえ。楮=こうぞ=などの樹皮から採った繊維）で織りあげた白布で製った衣。

◇ほしたり：乾されている。

◇天の香具山：藤原京の東に位置する山。

## 作者紹介

持統天皇（じとうてんのう）：[645—702] 第41代の天皇。在位 686—697。天智天皇の第2皇女。名は野讃良（うののさらら）。天武天皇の皇后となり、天皇の死後政務を執った。皇太子草壁皇子の死後、飛鳥浄御原宮（あすかのきよみはらのみや）で即位。のち、藤原京に遷都。文武天皇に譲位後、太上天皇として政務を補佐した。『万葉集』には六首をのこす。

秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いつへの方に我が恋やまむ（万葉集 2-88）

磐姫皇后



## 現代語訳

秋の田に実った稲の穂並——その上にたちこめる朝霧は、いつのまにか消えてしまう。あれみたいに、私の恋心もどこかへ消えていってほしいのだけれど、いつまでも私の胸に立ちこめたままだ。

## 注釈

◇秋の田の穂：秋、穂が実った稲田。一本の稲穂でなく、穂並を言っている。

◇む：意志を表す助動詞、しよう。

## 作者紹介

磐姫皇后（いわのひめのみこと）：仁徳天皇の皇后。履中天皇・住吉仲皇子・反正天皇・允恭天皇の母。天皇の側室黒比売・八田皇女に対する激しい嫉妬の話が伝わる。

いわしろ え さき  
磐代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへり見む（万葉集 2-141）

有間皇子

## 現代語訳

磐代の浜松の枝を引っ張って結び、道中の息災を祈る——願いかなって無事であったなら、また帰って来てこの松を見よう。

## 注釈

◇磐代：岩代とも。和歌山県日高郡南部町。熊野古道が通っていた。

◇む：意志を表す助動詞、しよう。

## 作者紹介

有間皇子（ありまのみこ）：舒明天皇 12 年（640 年）—斉明天皇 4 年 11 月 11 日（658 年 12 月 11 日）、孝徳天皇の皇子。皇子は性悟（さと）く、偽って狂ったまねをしたという。少年ながら政争に巻き込まれるのを避けたらしい。だが 657 年（斉明天皇 3）療病のため紀伊牟婁（むろ）温泉に行き、そのよさを斉明天皇に推薦して、翌年冬天皇の温泉行幸中、蘇我赤兄（そがのあかえ）に唆されて謀反を企て、赤兄に捕らえられて、送還の途中、紀伊藤白坂（和歌山県海南市藤白）で絞殺された。中大兄（なかのおおえ）皇子の毘にはまったといえる。

ますらをや片恋せむと嘆けども醜しこのますらをなほ恋にけり（万葉集 2-117）

舍人皇子

## 現代語訳

ますらをたる者、片恋なんかするものかと、自分に言い聞かせて嘆くけれども、ろくでなしのますらをだ、やっぱり恋してしまった。

## 注釈

- ◇ますらを：立派な男、一人前の男子。
- ◇醜：罵り言葉。

## 作者紹介

舎人皇子(とねりのみこ)：天武五一天平七(676—735)。天武天皇の皇子(第六皇子か)。母は天智天皇の皇女新田部皇女。

君が行く道の長手を繰りたたね焼き滅ぼさむ天の火もがも (万葉集 15-3724)

狭野茅上娘子

## 現代語訳

あなたが行く長い道のりを、くるくと手繰り寄せるようにして、焼き尽くしてくれる天の火がほしい。そうすれば、あなたは都に留まるしかないだろうから。

## 注釈

- ◇長手：長い道のり。遠路。
- ◇「たたね」：は下二段動詞「たたぬ」の連用形で、「畳む」意。長い物の先端に火をつけると、クルクルと畳まるように燃え縮み、焼き尽きてしまうことがある。
- ◇む：意志を表す助動詞、しよう。
- ◇もがも：終助詞、願望を表す。

## 作者紹介

狭野茅上娘子(さののちがみおとめ)：生没年不詳。『万葉集』後期の、奈良朝の女流歌人。『万葉集』巻15には、越前国(福井県)に流罪となった中臣宅守との間に詠み交わされた63首があり、そのうちの23首が娘子の歌として伝わるすべてである。宅守の配流の原因は詳しくはわからないが、娘子が天皇や祭祀に仕える蔵部女孺であつたらしいところから、宅守が禁忌を犯して娘子を娶ったためとも考えられる。天平12年(740)ごろのことであつたらしい。娘子の歌は、配流の地にある夫を思う内容であるだけに、きわめて熱情的で、絶叫的な表現にさえなっており、集中でも特異な位相にある。

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ（古今集2）

紀貫之

## 現代語訳

夏に袖が濡れて手に掬った水が、冬の間には氷ったのを、春になった今日の風が解かしているだろうか。

## 注釈

- ◇袖ひぢて：袖が水に漬かって。「ひち」は「濡れる」意の自動詞「ひつ」の連用形。
- ◇むすびし水：手で掬った水。「し」は過去回想の助動詞「き」の連体形。
- ◇こほれるを：（冬の間には）氷ったのを。「る」は完了・存続の助動詞「り」の連体形。
- ◇春立つけふ：立春の日である今日。
- ◇風やとくらむ：風が（氷を）解かしているだろうか。「らむ」は推量の助動詞。

## 作者紹介

紀貫之（きのつらゆき）：歌人・随筆家。三十六歌仙の1人。紀友則は従兄弟にあたる。延喜5年（905年）、醍醐天皇の命により初の勅撰和歌集『古今和歌集』を紀友則、壬生忠岑、凡河内躬恒と共に編纂し、仮名による序文である仮名序[2]を執筆した。「和歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける」で始まるそれは、後代に大きな影響を与えた。

君がため春の野にいでて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ（古今集21）

光孝天皇

## 現代語訳

あなたに捧げようと、春の野に出て若菜を摘む私の袖に、雪はしきりと降っている。

## 注釈

- ◇若菜：「菜」は食用となる草。
- ◇衣手：袖または袂を意味する歌語。

## 作者紹介

光孝天皇（こうこうてんのう）：天長7年（830年）—仁和3年8月26日（887年9月17日）は、第58代（在位：元慶8年2月23日（884年3月23日）—仁和3年8月26日（887年9月17日））の天皇。

ひさかたの光のどけき春の日に<sup>しづ</sup>静心なく花の散るらむ（古今集 84）

紀友則

## 現代語訳

日の光がやわらかにふりそそぐ今日——風もなく穏やかなこの春の日にあって、落ちて着いた心なしに、どうして桜の花が散ってゆくのだろう。

## 注釈

- ◇ひさかたの：枕詞。「日の光」「久し」の語感が響き、永々と穏やかに続く春の日のイメージを強めるはたらきをしている。
- ◇光のどけき：日の光がやわらかな。
- ◇しづ心：安定している心。平静な心。
- ◇花の散るらむ：なぜ花が散るのだろうか。

## 作者紹介

紀友則（きのともりの）：生没年未詳。宮内少輔紀有朋の子。貫之の従兄。子に淡路守清正・房則がいる（尊卑分脈）。

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに（古今集 113）

小野小町

## 現代語訳

花は色褪せてしまったなあ。我が身を徒（いたづら）にこの世に置き、むなしく時を経るばかりの、物思いをしていた間——空からは春の長雨が降り続けていた、その間に。

## 注釈

- ◇花の色：「花」は古今集の排列からすると桜。「色」は、感覚——特に視覚に訴える表象。自身の容色の意が掛かる。
- ◇うつりにけりな：以前とは変ってしまったなあ。容色が時が経つと共に失われた、の意が掛かる。
- ◇いたづらに：なすことなく。むなしく。
- ◇世にふる：世にあって時を経る。「世」には男女関係の意もあり、「恋に人生を費やす」といった意が掛かる。「ふる」は「降る」と掛詞で、「ながめ（長雨）」と縁語。
- ◇ながめ：じっと物思いに耽ること。「長雨」と掛詞になる。

## 作者紹介

小野 小町（おののこまち）：生没年不詳、平安前期 9 世紀頃の女流歌人。六歌仙・三十六歌仙の 1 人。歌風はその情熱的な恋愛感情が反映され、繊麗・哀婉、柔軟艶麗である。『古今和歌集』序文において紀貫之は彼女の作風を、『万葉集』の頃の清純さを保ちながら、なよやかな王朝浪漫性を漂わせているとして絶賛した。仁明天皇の治世の人物である在原業平や文屋康秀、良岑宗貞と和歌の贈答をしているため、実在性が高い、とする説もある。実際、これらの歌人との贈答歌は多く伝わっている。

月みれば千々に物こそ悲しけれ我が身ひとつの秋にはあらねど（古今集 193）

大江千里

## 現代語訳

月を見ていると、あれやこれや、とめどなく物事が悲しく感じられることよ。これも秋だからだろうか。秋は誰にもやって来るもので、私一人にだけ訪れるわけではないのだけれど。——それでも自分一人ばかりが悲しいような気がしてならないのだ。

## 注釈

- ◇千々に：様々に。「ち」は数の多いこと。下句に「ひとつ」があることから、「千」と「一」が対比されているとも見られる。
- ◇物こそ悲しけれ：さまざまな物事が悲しく感じられる。形容詞「物悲し」（なんとなく悲しい意）の強調表現と見る説もある。「こそ」「悲しけれ」は係り結び。
- ◇我が身ひとつの秋：私一人の秋。白氏文集の「燕子楼中霜月夜、秋来只為一人長」との関連を指摘する論者もいる。

## 作者紹介

大江 千里（おおえのちさと）：生没年不詳、平安時代前期の学者・歌人。弟に大江千古が中古三十六歌仙の一人。歌は儒家風で『白氏文集』の詩句を和歌によって表現しようとしたところに特徴がある。

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも（古今集 406）

阿倍仲麻呂

## 現代語訳

大空をはるかに仰ぎ見れば、月が出ている——春日の三笠山から昇るのを眺めた月と、

同じ月なのだなあ。

### 注釈

- ◇あまの原：広々とした大空。空を平原になぞらえて言う。土左日記ではこの句「青海原」とする。
- ◇ふりさけ見れば：遥かに仰ぎ見れば。「ふり」は振り仰ぐ。「さけ」は遠く離す、遠い距離を置く。
- ◇春日なる：春日にある。「微かなる」と掛詞とする説もある。
- ◇三笠の山：平城京の東方、春日大社背後の山。現在は御蓋山と書く。
- ◇出でし月かも：「し」はいわゆる過去回想の助動詞「き」の連体形。作者が月を見ているのは唐においてであるが、その月によって、昔奈良で見た月を回想している。

### 作者紹介

阿倍 仲麻呂(あべ の なかまろ)：文武天皇2年(698年)一宝亀元年(770年)1月)、奈良時代の遣唐留学生である。姓は朝臣。中務大輔・阿倍船守の子。唐で科挙に合格し、唐朝諸官を歴任して高官に登ったが、日本への帰国を果たせなかった。中国名は仲満のち晁衡または朝衡。



## 第二課 竹取物語

**题解：**《竹取物語》是日本最早的“物語”文学，产生于10世纪初，作者不明。故事讲一位伐竹翁在竹筒中发现一个三寸高的小女孩，带回家中放在竹篮里抚养。小女孩三个月便长大成人，且貌若天仙，起名叫辉夜姬。五个贵族公子前来求婚，但都因未能完成辉夜姬所设难题而终成梦幻，就连最尊贵的天子，也未能偿其所愿。后来在八月十五之夜，辉夜姬随着前来迎接的天人飘然返回月宫。本故事与流传于中国四川地区的《斑竹姑娘》内容相近，有学者认为两者有一定的渊源、联系。课文选了辉夜姬诞生，石作皇子求婚以及辉夜姬返回天界等几段故事，全篇精彩可见一斑。

### 1. かぐや姫の生立ち

今は昔、竹取の翁<sup>おきな</sup>といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さかきの<sup>みやつこ</sup>造となむ言ひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。翁言ふやう、「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となり給ふべき人なめり」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。妻の<sup>め</sup>姫<sup>おうな</sup>に預けて養はす。うつくしきことかぎりなし。いと幼ければ籠に入れて養ふ。

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけてのちに竹取るに、節を隔ててよごとに<sup>こがね</sup>金ある竹を見つくること重なりぬ。かくて翁やうやう豊かになりゆく。

この<sup>ちこ</sup>児、養ふほどに、すくすくと大きになりまさる。三月ばかりになるほどに、よき

ほどなる人になりぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳着す。帳のうちよりも出ださず、いつき養ふ。この児のかたちけうらなること世になく、屋のうちは暗き所なく光満ちたり。翁、心地あしく苦しき時も、この子を見れば、苦しきこともやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。翁、竹を取ること久しくなりぬ。いきほひ猛の者になりけり。

この子いと大きになりぬれば、名を三室戸齋部の秋田を呼びてつけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつ。このほど三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきはらず呼び集へて、いとかしこく遊ぶ。

## 現代語訳

今となつては昔のこと、竹取りの翁という者がいた。野山に入って竹を取つては、さまざまのことに使っていた。名前はさかきの造といった。彼が取っている竹の中で、根元が光る竹が一本あった。不思議に思つて近寄つてみると、竹の筒の中から光っている。その筒の中を見ると、三寸くらいの方がたいそうかわいらしい様子で坐っている。じいさんが言うには、「私が毎朝毎晩見る竹の中にいらっしゃるので分かつた。きっと私の子になりなされるはずの人のようだ」と思い、手のひらに入れて家へ持ち帰つた。彼の妻であるばあさんに預けて育てた。かわいらしいことこの上ない。たいそう小さいので、かごに入れて育てた。

竹取の翁が竹を取る時に、この子を見つけてからは節を隔てて節の間ごとに黄金の入っている竹を見つけることが重なつた。そうして、翁はだんだんと裕福になつていった。

この子は、養育するうちに、すくすくと成長した。三か月くらい経つころには、人並みほどの背丈になつたので、髪を結い上げる儀式を手配し、裳を着せた。帳台の中からも外には出さず、大切に育てた。この子の容貌の美しさには比類がなく、家の中には暗い所がなく光に満ちている。翁は、気分が悪く苦しいときも、この子を見ると苦しさが消えてなくなつた。腹立たしいことも慰められた。この間に翁は黄金の入つた竹を取り続けて長くなつた。そして、財力の大きい者になつていった。

この子は、背丈がたいそう大きくなつたので、三室戸齋部のあきたを呼んで名前をつけさせた。あきたは、「なよたけのかぐや姫」と名づけた。この三日間、酒盛りをして楽しんだ。詩歌や舞などいろいろな遊びを催した。男という男はだれかれ構わず呼び集めて、たいそう盛大に楽しんだ。

## 注釈

- ◇今は昔：日本の説話や古い物語の書き出しに置かれる一つのきまつた形式で、「今では昔の事だが」とか、「今からいへばずっと昔に」などの意。
- ◇野山にまじりて：野山に分け入つて。
- ◇髪上げ：女の子十二、三歳になると、成人の儀式として、おかつぱ頭を結い上げて、後に垂らすこと。
- ◇さうして：「左右して」で、手配しての意。



## 2. 石作りの皇子の話

なほ、この女見では、世にあるまじき心地のしければ、天竺てんじくにある物も持て来ぬものかと思ひめぐらして、石作いしつくりの皇子は、心の支度ある人にて、「天竺に二つとなき鉢を、百千万里の程行きたりとも、いかでかとるべき」と思ひて、かぐや姫のもとには、「今日なむ天竺へ石の鉢とりにまかる」と聞かせて、三年ばかり、大和国十市の郡やまとのこくとをちこほりにある山寺に、賓頭盧びんづるの前なる鉢の、ひた黒に墨つきたるをとりて、錦の袋に入れて、造り花の枝につけて、かぐや姫の家<sup>に</sup>持て来て見せければ、かぐや姫あやしがりて見るに、鉢の中に文ふみあり。ひろげて見れば、

海山の道に心をつくし果てないしのはちの涙ながれき

かぐや姫、光やあると見るに、蛍ばかりの光だになし。

おく露の光をだにぞ宿さましをぐら山にて何もとめけむ

とて返しだす。鉢を門に捨てて、この歌の返しをす。

しら山にあへば光の失うするかとはちを捨ててもたのまるるかな

とよみて入れたり。かぐや姫、返しもせずなりぬ。耳にも聞き入れざりければ、言ひかかづらひて帰りぬ。かの鉢を捨ててまた言ひけるよりぞ、面おもなき事をば、はちを捨つとは言ひける。

## 現代語訳

それでもやはり、この女と結婚しないでは、この世に生きてはいられない気持ちがあったので、たとえ天竺にある物であっても持ってこようと思いをめぐらし、石作りの皇子は目先の利く人であったので、「天竺に二つとない鉢を、百千万里の彼方へ出かけたとして、どうして手に入れることができよう」と思い、かぐや姫のもとには、「今日、まさに天竺へ鉢を取りに参ります」と知らせておいて、三年ほど経ってから、大和の国十市の郡にある山寺で、賓頭盧の前にある鉢の、真っ黒にすす墨がついているのを手に入れて、錦の袋に入れ、造花の枝につけてかぐや姫の家<sup>に</sup>持ってきて見せた。かぐや姫が半信半疑でその鉢を見ると、中に手紙が入っている。広げて見ると、

<筑紫の国を出て、海を越え山を越え、はるか遠い天竺までの道のりに精根を尽くし、石の鉢を手に入れる苦勞に泣き、血の涙が流れましたよ。>

かぐや姫が、石の鉢にあるはずの光があるかと見たが、蛍ほどの光さえもない。